
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「アジア・アフリカ地理言語学研究」令和2(2020)年度第1回研究会

日時：令和2年10月10日 9:00-15:00, 10月11日 9:00-15:30

場所：オンライン

使用言語：英語

今回はオンラインで行ったが、アメリカ・オーストラリア・シンガポール・ベトナムの研究者からの接続もあり、活発な議論が行われた。イギリス・クロアチア・イラン・ロシアからも参加希望はあったのだが、時差の関係で深夜になってしまうため、実際には接続されなかった。次回以降は日本時間の夜にも開催するなどの工夫をすれば、いながらにして世界中の研究者からの参加が見込まれる素晴らしい時代となった。

今次プロジェクトは遺伝学などの研究者とのコラボも行うことが目玉の一つであり、2018-23 科研費新学術領域「ゲノム配列を核としたヤポネシア人の起源と成立の解明」の領域代表者・斎藤成也、B03 班代表者・長田直樹、A02 班分担者・神澤秀明の諸氏にそれぞれウイグル人のゲノムがヨーロッパとアジアが半々に混じったものを例とした解説、アジア大陸北部、およびオーストロアジアを中心としたアジア大陸南部の諸語族と遺伝学的特質の関係に関する概観を与えていただいた。

言語地域としては、前期プロジェクトのアジア全域に加えて、アフリカも加わり、いっそう強力な陣容でマクロ・ミクロにわたる概観が得られ、3 年プロジェクトの初回を飾るのにふさわしい壮観な集会となった。
(遠藤光暁)

この項目のコーディネーター・鈴木博之のことば

会合に先立ち、共通の記述モデルを準備したが、それに収まりきらない特徴が散見された。中でも、セム諸語に見られる咽頭化子音の系列は、周辺言語の音体系にも影響を与えることが見て取れた。また、チベット・ビルマ諸語とインド・アーリア諸語、クラダイ諸語、オーストロアジア諸語との音体系上の類似点が、言語接触域で認められた。また、吸着音の実例を含む体系的な紹介もあり、取り上げた地域・言語の音声の諸相に触れることもできた。

以下は各人による要旨である：

ENDO Mitsuaki (Aoyama Gakuin University), Tasks of “Studies in Asian and African Geolinguistics”
2020-2022

まず、前期プロジェクト「アジア地理言語学研究」2015-2017 の成果を総覧し、*Studies in Asian Geolinguistics* が 8 号分、モノグラフが 7 号分、今年度末に *Linguistic Atlas of Asia* の刊行準備中であり、公約通り、またはモノグラフについてはそれを上回る実り豊かな共同研究となったことにつき、プロジェクトメンバーの積極的な貢献に対して感謝した。次いで今期の三カ年計画では 6 つの言語項目、1) 子音体系の一部(有声・有気などの特徴)、2) 文法関係の一部(主格・対格に相当するもの)、3) マウス・イヌ・サルなどゲノム情報の得られる動物語彙、4) 兄弟姉妹、5) ヒエ・アワ・ダイコンなどゲノム情報の得られる栽培植物語彙、6) 数詞体系を扱うことを述べた。今期はアフリカ地域が加わることで、遺伝学・考古学など隣接学科と積極的な連携を行うことが新機軸となる。

SAITOU Naruya (National Institute of Genetics), The Relationship between Language Contact and Human Population Contact

OSADA Naoki (Hokkaido University), Inference of East and Northeast Asian Population Histories using Present-day and Ancient Genome Sequence Data

KANZAWA-KIRIYAMA Hideaki (National Museum of Nature and Science), Tracing Movements of Ancient Southeast Asian and Oceanian Populations using Ancient and Modern Human Genome Sequences

SUZUKI Hiroyuki (Fudan University): Theoretical Frameworks for Stop Series in Asia and Africa

本発表では、最初に調音音声学の要点を振り返った。続いて、国際音声字母とともにそれと異なる音声記号の体系にも触れ、記述方法の多様性を紹介した。そののち、本テーマの記述方針について、背景情報を解説しながら、共通の枠組みで地図を作成する意義や目標を簡潔に述べた。

SHINAGAWA Daisuke (ILCAA) & KOMORI Junko (Osaka University) “Stop series in Niger-Congo”

本発表では、UCLA の UPSID から 55 言語、その他の資料から 30 言語の計 85 言語をサンプルとして、ニジェール・コンゴ語族 (Niger-Congo) における閉鎖系列子音の調音特徴とその分布をサーベイした。まず対立の数としては、2 対立の言語から 7 対立の言語までが認められた。分布として最も多数を占めたのは、**t-d-n** の 3 対立で、これは語族内部の系統的な差異を超えて広く確認された。全体的な大まかな傾向としては、北西部の非 Volta-Congo 諸語で対立が単純である一方、とりわけ南部の Bantu 諸語域においては対立数が多いのみならず、(喉頭素性に関するものを典型とする) 類型的に有標な特徴が多く認められた(ただし、North Atlantic また Ijoid にも対立数の多い言語が分布することは特筆すべきである)。また、体系的対応に関する特徴として、3 対立言語で有気音を含む体系は、**th-d-n** あるいは **th-t-n** であって、**th-t-d** という系列はサンプル内では確認されなかった。すなわち、**th** を含む系列は、**d-n** ないし **t-n** という oral-nasal の最小対立を基盤とする傾向があると(暫定的に)考え

られる。一方で、最も頻繁に確認された **t-d-n** を含め、分布の観点から言って dominant であり（各対立数グループのなかで）canonical と言える体系は、次のような連鎖的対応関係を見せている（あくまでもタイプ間関係の共時的対応をまとめたものであって、歴史的な発達のプロセスを直接的に含意するものではないことに注意）；[2] **t-d** → (+n) → [3] **t-d-n** → (+nd/+d) → [4] **t-d-n-nd**/[4-GC] **t-d-n-d** → [5] **t-d-n-nd-d** → (+nt) → [6] **t-d-n-nd-d-nt**。これらが、どの程度歴史的発達段階のプロセスと関連しているのかといった点を含めた可能な体系間の相互関係に関する特性については、さらに詳細な調査、分析が必要になる。

KIMURA Kimihiko (TUFS) and NAKAGAWA Hiroshi (TUFS), Stop Series in the Kalahari Basin Area

はじめに、従来の「コイサン諸語」という言語グループの概念を、より正確に捉えることのできる言語地域「カラハリ言語帯 Kalahari Basin Area (KBA)」が導入された研究史上の背景について略述した。続く本編前半では、まず、KBA 諸言語の地域特徴である子音体系の複雑さと語根における音素配列の歪んだ分布の要点を述べた上で、語根頭位置に現れる子音目録を KBA 横断的に俯瞰し観察・分析した。観察される全ての子音を包括的に同定し分類するために使用する「KBA 子音チャート」の設計を、吸着音の調音機構を分析しながら解説した。現時点までの KBA 諸語の分析結果は、この子音チャートが、横軸に 13 種類の拡張調音点（5 つの吸着音タイプを含む）を、縦軸に 23 種類の系列 (Series) を必要とすることを示した。本編前半では、さらに、KBA で話される Glui 語を例に、吸着音を含む音節頭子音の実演も行った。

本編後半では KBA 内部における、吸着音を含む頭子音の地理的パターンについて論じた。まず、吸着音目録のタイプ (Click inventory type)、つまり、子音体系に含まれる Click type の組み合わせの種類に注目すると、東部オクワ小語群 (Eastern Okwa Complex) の内部でのみ、**l-l̥+![~k]** もしくは **l-l̥+[k~!]** というクリックと非クリックの変異が観察され、! の使用に変動性があることが確認された。また、3 つの喉頭素性 [**±voiced**, **±aspirated**, **±ejective**] の組み合わせから成る系列タイプ (Series type) に注目すると次の 3 点が観察された：

- (1) 3 タイプ (**l-g-l̥-l̥-g-l̥-l̥'** タイプ、**l-g-l̥-l̥-g-l̥** タイプ、**l-l̥** タイプ) は特定の語族・小語群 (language complex) 内部のみにみられる。
- (2) **l-g-l̥-l̥'** タイプは複数の隣接する語族にみられ、これが言語接触によるものである可能性がある。
- (3) KBA の言語地域に普遍的な弁別的喉頭素性は [**±aspirated**] であり、地球規模で無標とされる [**±voiced**] と一致しない。

NAKAO Shuichiro (Osaka University), Stop Series in Nilo-Saharan

まず、「ナイル・サハラ語族」は現時点では研究者により、メンバーシップや各語派間の系統論的關係について異論が存在し、広く支持される祖語の再建が行われていないことを述べた。この上で、123 言語を主として喉頭素性の対立の数により 5 タイプの分類（下

位分類を含めると 10 タイプ) し、1) 喉頭素性を 1 種類のみ弁別するタイプ (なかんずく t-d-n タイプ) が最も広範に分布しているといえること、2) 入破音 /d/ をもつ言語はいわゆるスーダン・ベルト地域 (西アフリカからエチオピア高地南西端) に広く分布していること、3) 放出音 /t/ はほぼエチオピア高地南西端にのみ分布していること、4) 喉頭素性を一切弁別しないのは東アフリカの南ナイル語派のみであることを述べた。さらに、多くのナイル・サハラ語族の言語は歯茎音 vs. 歯音ないし反舌音 vs. 歯茎音の対立をもつが、言語によっては特定の喉頭素性をもつ場合にはそれらの対立が見られない場合があることを述べた。

NAGATO Youichi (TUFS), Stop Series in Semitic

現代南アラビア諸語やエチオピアのセム諸語 (ゲエズ語、アムハラ語、ティグリニア語、ティグレ語) では放出音を含む *t-d-n-t'* 型であり、またアラビア語を除く古代北西セム諸語 (ヘブライ語、アラム語、ウガリト語、フェニキア語) の強勢音が無声のみ (t, s, k) であることから、セム祖語では *t-d-n-t'* 型であったと考えられる。現代アラム語やアラビア語は強勢音の実現形が放出音から咽頭化音になり、アラビア語では有声子音の咽頭化音が生じて強勢音も無声/有声の対称的な体系となった。アラビア語の周縁方言 (マルタ語、ウズベキスタン方言、キヌビ) および現代ヘブライ語では強勢性を失い、*t-d-n* 型となり、キプロス方言ではさらに無声/有声の対立を失って *t-n* 型となった。

IWASAKI Takamasa (Kyoto University, JSPS), Stop series in Iranian.

現代イラン諸語ではイラン祖語 *t-*d-*n と同じタイプの t-d-n が最も広く見られる。また、コーカサスからトルコ東部、カスピ海地域では無声有気音 th の存在が広く見られ (th-d-n あるいは th-t-d-n)、クルド語諸方言に関しては隣接するアルメニア語の影響と説明される。さらに周りをコーカサス諸語に囲まれているオセッソ語 (イロン、ディゴル) では放出音が見られ、th-t'-d-n となっている。インド亜大陸に接する地域で話されるイラン諸語の一部にも有気音が観察されるが、言語によってはその音素としての位置づけに議論がある。また、中近東のアラビア語圏と接している地域では、おそらくアラビア語の影響により咽頭化音 (あるいは軟口蓋化音) を加えた t-tʰ-d(dʰ)-n のタイプが認められる。

YOSHIOKA Noboru (National Museum of Ethnology), Stop Series in South Asia

初めに、今期での担当する言語を Indo-Aryan, Nuristani, Andamanese と Language Isolates に限定することを述べた。Dravidian と Iranian に関しては別の担当者が新規加入したためである。歯茎閉鎖音の系列に関して、対象とした 76 言語について大きく 7 種類に分類した。A: th-t-d-dh-n 型が Indo-Aryan 系統での最古の姿であり、そこから dh が失われた B: th-t-d-n 型と合わせて、全体の 3 分の 2 を占めていることが分かった。パンジャービー語などでは、dh が失われることが声調の出現の引き金になっている。アンダマン語族やブルシヤスキー語

も、専ら B 型である。南アジアの周縁部では C: t-d-(ʔd)-n 型が分布、それより内側には D: th-t-d-dh-n-nfi が分布している。マイナーなタイプとしては、インダス川下流域に分布する、入破音を持つ E, F 型や、インド・バングラデシュに跨って分布する、声門閉鎖を伴った有声破裂音 (dʔ) 系列を持つ G 型のビシュヌプリア語などがあった。南アジア外の Indo-Aryan 言語は、ヨーロッパのロマ語やロマヴレン語が B 型、中東のドマリ語が C 型であった。ドマリ語は咽頭化閉鎖音も持っているが、歯茎音以外でその特徴が体系的にあるわけではないので、今回は捨象した。いわゆる「ジブシー」系言語は、パキスタン北部のドマーキ語も含めて、どれ一つとして dh を持っていないので、民族移動の初期からすでに A 型ではなくなっていた可能性が考えられる。

KODAMA Nozomi (Kumamoto University), Stop Series in Dravidian

ドラヴィダ系言語の祖体系としては、t-n 型が再建されるが、現在もこのタイプとみられるのは、タミル文語を除けばスリランカのタミル語方言のみであり、他の地域では語頭でも t/d の対立のある言語がほとんどである。さらに、インド・アーリヤ語と同様の、th-t-d-dh-n タイプの言語も分布しているが、このタイプには、主としてサンスクリットの借用語の流入により th, dh が獲得された大言語と、インド・アーリヤ語との二言語併用を通じて th, dh が獲得されたのではないかと疑われる少数言語に二分できるだろうと述べた。前者のタイプでは t が本来音声的には有気であるために th がこれとの弁別を維持するために不安定になりやすかったのではないかということを、テルグ語を例に論じた。また、借用語以外に現れる th, dh が子音連続に由来する可能性について、テルグ語の数詞を例に言及した。

UTSUMI Atsuko (Meisei University), Stop Series in Austronesian

オーストロネシア語族は、音韻体系が比較的シンプルである。多く言語は母音は 3 から 6、子音は 22 以下である。調音方法は「閉鎖音」「摩擦音」「破擦音」「鼻音」「流音・弾き音・ふるえ音」であり、わずかな言語に implosive が認められるだけで、ほとんどの言語は pulmonic な音素のみを使用する。しかもこれらの implosive はしばしば prenasalised stop と混同される。帯気音と非帯気音の区別もわずかな言語に見られるだけである。

閉鎖音のシリーズに関する調音位置は、「両唇」「歯茎」「硬口蓋」「軟口蓋」「声門」の五つあるいはそれ以下である言語がほとんどである。歯茎の閉鎖音と鼻音に関しては、/t, n/ あるいは /t, d, n/ のどちらかである。少数の言語は /nd/、さらにわずかな言語は /nt, nd/ の prenasalised stop(s) を有するが、これらの prenasalised stops は台湾、フィリピン、西インドネシア、にはほとんど見られず、カリマンタン、スラウェシ、パプア・ニューギニアおよび太平洋の島々に少数見られる。

SHIMIZU Masaaki (Osaka University) and MINEGISHI Makoto (ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies), Stop Series in Austroasiatic

対象を Proto Austroasiatic の音節構造 $C_1C_2VC_3$ の C_2 に限定し、Sidwell (2015)による stop series の祖型 *t-d-d-n を基礎に、A. th-t-d/d-n 型、B. th-t-d-d-n 型、C. th-t-n 型、D. t-d-n 型、E. t-n 型の 5 つに分類し考察した。まず、記述方法の差異により有声音の実現が d か d̥ か不明な場合があるものの、少なくとも有声音/無声音の対立不在が明らかな C 型の分布と声調言語の分布に重なりが見られること (Khmuic, Palaungic, Vietic)、A 型の分布と Register 言語の分布に重なりが見られること (Katuic, Monic, Bahnaric, Khmer) が指摘された。一方で、声調言語の代表格であるベトナム語の内部変化を考慮するとその特異な分布が理解されること、比較的新しい進化を遂げたそのベトナム語を挟む形で Kra-Dai と Austroasiatic に ?n が分布することが指摘された。

ENDO Mitsuaki (Aoyama Gakuin University), Stop Series in Kra-Dai

まず、Kra 語派の重要性を認識したため、語族名を Tai-Kadai から Kra-Dai に変更したことを述べた。Kra は古風な語形を保ち、Austronesian とよくつながるという Ostapirat の貢献に賛同してのことである。扱った 214 地点のうち、数量的には圧倒的に多いタイ語派(バンコクなど)のような H: th-t-d̥-n 型がタイ祖語の有声頭子音 *d の消失と低声調類の分岐によって現れ、有気音が無気音に合流してチワン語のような M: t-d̥-n 型となった。それ以外の語派ではより多くの対立が存在し、最も多いのは水語の E: th-t-d̥-n-?n 型で、貴州省など東端に見られる。タイ祖語とそれ以外の対応関係は明瞭でない点があり、それ以外のおのおののタイプの通時的な形成過程を跡づけるためには更に精密な比較言語学的な考察が必要である。

SUZUKI Hiroyuki (Fudan University), EBIHARA Shiho (JSPS/ILCAA, TUFS), IWASA

Kazue (Nagoya University of Foreign Studies), KURABE Keita (ILCAA, TUFS), and SHIRAI Satoko (ILCAA, TUFS): Stop Series in Tibeto-Burman

本発表では、約 700 地点のチベット・ビルマ諸語 (TB) のデータを取り扱った。TB の再構形およびチベット系諸言語の音変化を参考に、閉鎖音のタイプを大きく 5 つに分けた。各タイプの分布については、次のような特徴を認めることができる。もっとも原初的な体系である無声-有聲の対立をもつ言語は、ブータンから中国雲南にかけて分布するが、少数である。無声有気-無声無気-有聲の対立が最も広く見られる。無声有気-無声無気-有聲-有息漏れの 4 系列を有する言語群は、主としてネパールからブータンにかけて分布する。加えて、入破音をもつ言語はミャンマーを中心に分布する。周辺の非 TB 言語群との言語接触を考えることができることを述べた。

TAGUCHI Yoshihisa (Chiba University), Stop Series in Hmong-Mien

この発表では、ミャオ・ヤオ諸語の子音における、有聲無声・有気無気・前鼻音化の有無・声門化の有無といった特徴に着目して子音体系を分類し、祖語からの変遷のパターンによってグループを作成し、そのグループの地理的分布を図像化した。初歩的な考察としては、有

声破裂音の存在と前鼻音化音の存在が相補分布的な傾向を示すこと、有気無気の対立の欠如はミャオ・ヤオ諸語の中国国内分布の南端に見られていることがある。

MATSUMOTO Ryo (Kansai University of International Studies), Stop Series in Tungusic and Uralic
ツングース諸語とウラル諸語における閉鎖音系列のタイプについて報告した。ツングース諸語では他のアルタイ諸語と類似していて、t-d-n の一つのタイプだけがあると認められる。一方ウラル諸語では、t-d-n と t-n の 2 つタイプがあり、後者の方がより古い段階であると思われる。バルト・フィン語派では基本的に t-n であるが、語頭に限らなければ t-tt-n (閉鎖時間の長さの対立) という音韻的の系列もある。

ONO Chikako (Hokkai-Gakuen University) , Types of manner of articulation in Chukotko-Kamchatkan consonantal systems (including stop series)

パレオアジア諸語のうち、チュクチ・カムチャツカ諸語の語頭子音の音対応を見た。チュクチ・カムチャツカ諸語のうちチュクチ語, アリュートル語, コリャーク語, ケレク語は一つの語派を成しており、語彙と文法において近い特徴を有しているが、イテリメン語はこれらとは大きく異なる。しかし中には比較的近い子音の音対応が観察される項目もある (表 1)。

<表 1>

	door (t-n)	back (q-k')	hair (k-γ-k')	heart (ɬ-l-lj)
Chukchi	tətəɬ	qeptin	kərwir	ɬiŋɬiŋ
Alutor	təltəl	qaptin	γətyən	liŋliŋ
Koryak	təllətəl	qaptin	kəɬfwij	liŋliŋ
Itelmen (N)	nutʃ	k'aatʃ	k'əmk'əm	ɬəɬɬutʃ
Itelmen (S)	nutʃ	k'awatʃ	k'imk'im	ɬ'intʃ

Kurebito et al. (2001)のデータによる

語頭の子音では t-n, q-k', k-γ-k', ɬ-l-lj などの音対応が確認された。今後は各言語の方言データを収集し分析する必要があることを報告した。

FUKAZAWA Mika (National Ainu Museum), Stop Series in Ainu

アイヌ語は、t-n 型の一様分布であるということを報告した。アイヌ語の /t/ は有声無声の区別がないことで知られており、日本側の記録である 1792 年成立のアイヌ語・日本語辞典『藻汐草』の原本で「オタシャム」と記載されているものが、その写本では「オダシャム」と記録されるなどということがよく見られる。アイヌ語北千島方言に関する 19 世紀の記録

でも、t と d のどちらの表記も確認できる。樺太のナイロ方言では、その他のアイヌ語方言の頭子音が r- のものに t- が対応することがあり、Vovin (1993) はこれを理由としてアイヌ語祖語に *d- を再構している。/n/ [n] については、[k] の前で [ŋ] となる。服部・知里 (1960) によれば、樺太のオチホ方言では [n] ではなく [ŋ] と記述されている。

YAGI Kenji (Kokushikan University), Stop series in Sinitic

中国語方言 1146 地点の状況について、歯茎破裂音の種類に着目して分類して地図化した。議論の単純化のため、そり舌・口蓋化の系列と、鼻音系列については別の地図に示した。破裂音の種類が最も多いのは t, th, d, dh などの 4 種類を有する方言で、四川・江西・海南の 3 省に分布している。3 種類の破裂音を有する方言は浙江・湖南・広西など南方を中心に比較的広く分布する。切韻 (601 年) に代表される中古音の破裂音の種類もこの類型と同じとなる。最も広範囲に分布するのは t, th など、二種類の破裂音を有する類型で、標準語の基盤となる北京方言もここに含まれる。最も合流が進み 1 種類のための破裂音を有する方言が四川・江西・海南に見られる。

FUKUI Rei (The University of Tokyo), Stop Series in Korean

韓国語 (朝鮮語) の閉鎖音には 3 つの口閉鎖音 (oral stop) と 1 つの鼻閉鎖音 (nasal stop) がある。歯茎音では t - tʰ - t' - n となる。

3 つの口閉鎖音 (oral stop) は、日本では普通、平音・激音・濃音と呼ばれるが、英語ではさまざまな呼称が使われており、本発表ではまずこれらの呼称を比較的最近の研究から整理して提示し、ついで実験音声学的な観点からの先行研究の概要を論じる。また、最近のソウルの若年層の発話では、平音と激音の VOT が接近し、VOT ではなく後続する母音のピッチによって区別されるようになったという研究についても紹介するが、これは語頭の話であって、語中では依然として VOT で区別されており、2 つの音素がピッチ以外の面で完全に合流したわけではないこと論じる。

これらの子音の地理的な分布に関しては、半島内で大きな違いはなく、ほぼ一様分布となる。最後に中世語からの歴史的な変化について紹介した。

NAKAZAWA Kohei (NINJAL) and YOKOYAMA Akiko (JSPS/ ILCAA), Stop Series in Japonic

まず、各方言が持つ (歯茎) 閉鎖音の音韻体系に基づき、日琉諸方言を共時的に以下の 7 つのタイプに分けた。A : t-ⁿd-n (前鼻音化された有声阻害音のあるタイプ)、B : t-d-ⁿd-n (有声阻害音に前鼻音の有無の対立があるタイプ)、C : t-d-n (有声阻害音に前鼻音がないタイプ)、D : t-tʰ-d-n-nʰ (阻害音と鼻音の両方に弁別的な喉頭化があるタイプ)、E : t-tʰ-d-n (無声阻害音に弁別的な喉頭化があるタイプ)、F : t-d-n-nʰ (鼻音に弁別的な喉頭化があるタイプ)、G : t-n (有声阻害音のないタイプ)。ついで、地理分布と方言間の音対応を検討し、

A タイプが日琉諸方言の最も古いタイプとしたうえで、歴史的変化は次の通りであることを主張した。A = A (本土周辺地域)、A > B (東北)、A > B > C (東日本の一部)、A > C (本土と南琉球の大部分)、A > C > D (北琉球の一部)、A > C > D > E or F (同左)、A > C > D > E or F > C (同左)、A > C > E (与那国島) および A > C > G (大神島)